# 保育の記録にみられる手技

## ——大正時代から昭和10年にかけて——

清　原　みさ子

**はじめに**

本論集第57号で、明治時30年代後半から大正時代にかけての手技の実際について、名古屋市立第一幼稚園の「週録」を中心に、京都市立城巽幼稚園と小川幼稚園の「日誌」を分析した。ここでは、名古屋市立第一幼稚園（以下、第一幼稚園とする）、京都市立小川幼稚園（以下、小川幼稚園）と京都市立城巽幼稚園（以下、城巽幼稚園）、松本市立松本幼稚園（以下、松本幼稚園）の「日誌」等[1)]から、大正時代から昭和10年までの手技の実際について明らかにしたい。

小川幼稚園の「日誌」は明治以降大量に残されているが、昭和５年度は「保育日誌」が残されていて、保育内容に関する記述が「日誌」よりも多くなされているので、これを中心にとりあげる。

これらの資料に記されている、手技として行われていたことは、同じ幼稚園の同年度でも異なる書き方がされていることもあるので、ここでは「摺紙」「剪紙」「画き方」「ぬり絵」等と記述することとする[2)]。

**１．手技で行われていたこと**

本論集第57号では、大正４年度までの資料をみてきたが、その後、大正時代の「日誌」は、小川幼稚園と城巽幼稚園、松本幼稚園のものがある。小川幼稚園の大正時代の「日誌」には、保育内容にかかわる記述は少ない。手技にかかわる記述もごくわずかしかみられないが、大正９年、13年、14年、15年には、手技として行われていたであろうことがうかがえる記述がみられる。そこから、「自由画」「絵画」「彩色」「摺紙」「麦藁」「画き方」「ぬり絵」という言葉が記され、「かるた」の製作も行われていたことがわかる。大正14年３月には、「製作品等ヲ持チ帰ラセタ」とあるので、さまざまな製作がなされていたと思われる。城巽幼稚園の大正15年度の日誌にも、「園児に二学期の成績品を配布した」と書かれているので、このように製作したものを持ち帰らせることは、しばしば行われていたと思われる。だが、具体的にどのようなものを製作していたのかは、不明である。

松本幼稚園における大正時代の手技は、２年度（一之組）、３年度（２之組）、４年度（三ノ組）、５年度（一之組）、10年度（三組）、13年度（組不明）の様子がわかる。各年度一年分残されているわけではなくて、半数は４カ月分しかない。本論集第57号では、松本幼稚園は分析対象としていなかったので、ここでは大正２、３、４年度の分もとりあげる。

どの年度でも行われていたのは、「摺紙」「剪紙」「画き方」である。行われていた年度が多かったのは、「豆細工」「積木」「板排」「はさみ方」である。「つなぎ方」「箸排」「縫取」「組方」「貝排」が行われていた年もある。「貝排」は、大正２、３年度には行われていたが、その後は記述されていない。「織方」「はめ板」「刺紙」「結び方」が記されていたのは、一つの年度のみである。大正３年度には、「書方」も１回のみであるが、記入されていた。

大正時代を通してみると、一番多かったのは「摺紙」、二番目は「剪紙」、三番目は「積木」であった。「豆細工」は、大正２年度は「剪紙」と並んで二番目に多かったが、大正13年度には１回も記入されていなかった。ただし、大正13年度は12月からで、他の年度をみると「豆細工」は12月以降には行われることがほとんどなかったので、13年度にとりあげられていなかったかどうかは定かではない。「画き方」は、手技に占める割合が10％前後の年度が多かった。

昭和に入ってからは、松本幼稚園については、昭和3年度（黄之組）、昭和4年度（一之組）、昭和6年度（赤之組、紫之組）の日誌が整理されている。昭和3、4年度は「摺紙」が一番多い。昭和6年度は、組により若干違いがあるが「画き方」と「剪紙」「摺紙」が多い。全体として多いのは「摺紙」と「画き方」、ついで「剪紙」「貼紙」である。後は大幅に減って、「ぬり絵」「豆細工」で、昭和6年度の「紫之組」の「ぬり絵」を除いて、手技に占める割合は10％にも満たない。ごく少数ではあるが「つなぎ方」はどの年度・組にもあり、「積木」「箸排」「環排」はとりあげられたり、とりあげられなかったりしている。「組紙」「縫取」は、昭和6年度の「紫之組」のみにみられる。「板排」「貝排」「はさみ方」は、記されていない。ここでは「厚紙細工」「手技」という記述や、「共同製作」「自然物細工」という記述もみられる。「恩物」と記されている日もあり、これは昭和3年度の「黄之組」をみると、「七巧台」「積木」「三体接ぎ」「粒体」「板排」「はさみ方」「石盤」「箸環」などから、その日によりいくつかが用意されていた。「自由」となっていて、選んで活動することも行われていたと思われる。

小川幼稚園の昭和5年度には、「画き方」が一番多く、次いで「彩色」が多い。ほかに「摺紙」「貼紙」「剪紙」「粘土」「つなぎ方」が行われていた。回数は少ないが、「豆細工」「三体」「棒さし」「積木」「ならべ方（板、箸）」「排べ方（箸環）」「紐並べ」「輪つなぎ」「製作」という記述もみられた。他の年度でも、「彩色帖」「摺紙」「つなぎ方」「麦藁通し」「自由画」「粘土」「ぬり絵」等が行われていたことがうかがえる。昭和10年度には、「共同作製（動物園）（植物園）（街）」という記述がなされていて、共同製作がなされていたことがわかる。

城巽幼稚園では、昭和3年度に「摺紙」や「お雛様」の製作、昭和4年度に自然物を使った製作や「摺紙」等が行われていた。やはり京都市立である日彰幼稚園では、昭和6年度に「自由画」「ぬり絵」が行われていた。

第一幼稚園では、昭和2、4年度の「二ノ組」「二組」で「ぬり絵」「摺紙」「画き方」が多い。この三種類で半分以上を占めている。後は少ないが「豆細工」「粘土」「積木」もとりあげられていた。昭和2年度には、「織紙」、昭和4年度には「ちぎり紙」が行われている日もあった。昭和4年度の「一組」では、「画き方」と「ぬり絵」は比較的多いが「摺紙」は少ない。この「一組」では、描いたり、はったり、切ったりを複合的に行う手技、製作がしばしばなされていた。また、「木工」や「ボール紙製作」「キビガラ細工」も行われていた。第一幼稚園でも、昭和4年度の「二組」には「画き方」で「共同」、「貼紙」で「共同製作」という記述がみられた。

大正時代初めの手技の様子に関しては、すでに本論集第57号でとりあげた大正2年度の第一幼稚園の「一の組」「三の組」のものがあるが、そこでは、「摺紙」「画き方」「積木」が上位を占めていた。明治時代から大正時代に入ると、「画き方」が多くなっていたが、松本幼稚園では大正時代を通じて「画き方」が多くなることはなかった。「画き方」に関しては、松本幼稚園と第一幼稚園では違いがみられる。

昭和の初めは、ここでとりあげた三園で違いがみられる。年度や組による違いはあるものの、小川幼稚園では「画き方」「彩色」、第一幼稚園では「ぬり絵」「画き方」が上位を占めていて、松本幼稚園とは異なっている。特に「ぬり絵」は、松本幼稚園では昭和3年度から4年度、6年度と多くなっていくが、昭和6年度でも二組を平均して10％ほどであるので、小川幼稚園、第一幼稚園と比べると、とりあげられる頻度は低かったといえよう。

## 2．題目

どのような題目がとりあげられていたのか、種類別にみていく。まず「摺紙」であるが、松本幼稚園で、大正時代から昭和の初めを通して、比較的よくとりあげられていたのは、「屏風」「舟」「バッタ」「家」「カブト」「福助」「オルガン」「帆掛船」「羽子板」である。「風車」「菊皿」「二艘船」「狐の面」「こむそう」「三宝」「蝉」「おひな様」「レンゲ」「お宮」「亀」等も、大正時代にも、昭和に入ってからもとりあげられていた。「襦袢」「股引」「チリトリ」「鉄砲船」「柿之花」等は、大正時代にのみとりあげられていた。昭和になってからとりあげられていたのは、「つばめ」「馬」「蝶」「奴」「時計」「朝顔」「カバン」「額」「手さげ」「パチンコ」等である。

昭和5年度の小川幼稚園では、「てふ」「ボート」「時計」「運動帽」「ピアノ」があげられていた。第一幼稚園では、昭和2年度に「風船」「金魚」「ホタル籠」「朝顔」「柿」「ヨット舟」「帆掛舟」がとりあげられていた。昭和4年度の「二組」では「おざぶとん」「オ家」「ニサウ舟」「烏」「虫カゴ」「ボート」「朝顔」「鬼」「枡」があげられていたが、「一組」では「郵便屋さん」のみであった。この二つの園で共通の題目は「ボート」のみである。

小川幼稚園と第一幼稚園の日誌に記されている題目数は、松本幼稚園より少ないので、この二つの園で行われていたことが松本幼稚園でも行われていたかどうかみる

こととする。小川幼稚園とは「てふ」(松本幼稚園では「蝶」)と「時計」が、第一幼稚園とは「帆掛舟」「おざぶとん」(同「座布団」)「オ家」(同「家」)「ニサウ舟」(同「二艘舟」)「朝顔」が共通である。「蝶」「時計」「朝顔」「座布団」のような松本幼稚園で昭和に入ってからとりあげられている題目は、京都や名古屋でもとりあげられていて、広がっていたと思われる。

『愛知県立大学児童教育学科論集』第33号の「わが国幼稚園における手技の歴史―その9―」で、大正15年の幼稚園令制定以降昭和10年までの手技についてまとめた中で、「摺紙」でとりあげられていた題目をみると[3)]、「山」「蝶」「かぶと」「時計」「朝顔」等があげられていた。ここからも、こうした題目は広く行われていたことがうかがえる。

本論集第57号で明治時代から大正時代の「摺紙」で行われていた題目をみてきたが、「帆掛舟」「二艘舟」「鉄砲船」「三宝」「蝉」「かぶと」「馬」「家」等は、明治30年代後半にもとりあげられていたので、こうした折り方は引き続き行われていたといえよう。そこでみた第一幼稚園の大正2年度の「週録」には「オルガン」があり、松本幼稚園でもとりあげられていたことから、大正時代にとりあげられるようになったと思われる。

次に「画き方」であるが、昭和に入ると「自由画」という時が多く、具体的な題目が記されていることの方が少ない。松本幼稚園では、大正時代は回数自体が少ない。大正2年度は「ウチワ」「カカシ」「こま、羽子板に羽ね」、大正3年度は「記憶画　ゑびす講」「ねずみ」「船」「人　自由」、大正4年度は「山ニ月」「国旗」「鳥居」「のぼり」「富士山にかすみ」「人の形」等、大正10年度は「連隊旗」「山」「家」がとりあげられている。昭和に入って回数が大幅に増えるが、「自由画」の占める割合が高くなる。具体的な題目としては、昭和3年度に「桜葉」「茄子と胡瓜」「朝顔」「お祭」「林檎」「旗行列」「帽子写生」「人」等、昭和4年度に「鯉のぼり」「花を自由」「いてふ」「人物」「田川部の思い出」「お正月の観察」「自動車、汽車」等、昭和6年度は「赤之組」で「薄」「飛行機の飛んでいるところ」、「紫之組」で「人」「休み中の思い出」「林檎」「薄」「秋景色」「お正月」「兵隊さん」等が記されている。

小川幼稚園では、「軍艦」「人物」「記憶画　休ミ中の事ども」「菊見の発表」「御室行の発表」等が行われている。

第一幼稚園では、昭和2年度に「草カキ」、昭和4年度に「一組」で「運動会の自由画」「林檎の写生」、「二組」で「飛行機」「自由に松茸」がとりあげられている。

本論集第57号でふれたように、第一幼稚園の大正2年度には「山トススキ」「家」「鳥居」「羽子板」「山ニ月」「国旗」等がとりあげられていた。昭和に入ると三園とも、決まった題目の場合は、幼児の身の回りにある自然物や経験したことの思い出が中心になっていることがわかる。

「剪紙」は、松本幼稚園では行われた回数が多かったので、大正2、3年度と昭和に入ってから、比較的多くの具体的な題目が記されているが、小川幼稚園では少ない。第一幼稚園では、「剪紙」そのものが少ない。切ることが含まれていると思われる製作以外で「剪紙」の題目が書かれていたのはごくわずかである。ここでは、明治時代から行われていた「紋形」以外は共通してとりあげられている題目は少ない。松本幼稚園で、大正時代にも昭和に入ってからもみられる題目は、「瓢箪」「自動車」くらいである。大正時代に複数年度でとりあげられていたのは、「桜」「風船」「紅葉」「こま」「鯉幟」である。昭和に入って比較的よくみられるのは、「たんぽぽ」「朝顔」「タオル」で、複数年度でとりあげられていたのは「菖蒲の葉」「日傘」「果物籠」「トマト、キュウリ」や「立体物」の「犬」「羊」である。松本幼稚園で昭和3年度に行われていた「馬」は、第一幼稚園の昭和4年度の「一組」でも行われていた。この組では、「花」もとりあげられていた。小川幼稚園での「紋」以外の題目は「バナ丶、リンゴ」と「お金」であった。

「ぬり絵」は、松本幼稚園では昭和に入ってからとりあげられている。小川幼稚園では、「彩色」となっているが、内容は「塗絵」と同じだと思われる。松本幼稚園では、昭和2年度は「風船」「ほほずき」のみで、このうちの「風船」は他のどの年度でもとりあげられている。複数年度で行われていたのは「桜桃」「林檎」で、具体的な題目が一番多く記入されていた昭和6年度の「紫之組」では、「お月見の三宝」「いてうの木」「柿みかん」「景色」「すべり台」「お雛様」「飛行機」もあげられていた。松本幼稚園と同じ題目は、第一幼稚園の「風船」と「お雛様」だけである。小川幼稚園と第一幼稚園では、「国旗(日の丸)」「チューリップ」「七夕」が共通である。

「積木」は、松本幼稚園では大正時代に「汽車」「家」が比較的よく行われていたが、昭和に入ると回数が激減し、具体的な題目は昭和3年度に「門」が記されているだけである。この「門」は大正時代にもとりあげられていた。小川幼稚園では、「軍艦」「汽車及停車場」が記入されていた。第一幼稚園では、昭和4年度の「二組」の「電車通」のみである。

回数は少ないが、「豆細工」の題目をみておく。松本幼稚園の大正2年度だけは、「豆細工」の回数が多い。そこでは「弥之助」をはじめ、「三角」「魚」「ハシゴ」「風車」「三角体」「こま」「四角立方体」等、『手技図形』[4]でもとりあげられていた題目がみられる。「弥之助」や「こま」「三角」「ハシゴ（梯子）」は大正時代にも昭和に入ってからも、比較的よく作られていた。大正2年度の「三角体」と昭和4年度の「立体の三角」も同じものだと思われる。昭和に入ってからは、「飛行機」もよくとりあげられている。小川幼稚園では「魚」と「国旗」、第一幼稚園では昭和2年度の「二ノ組」で「弥次郎兵衛」と「国旗」が作られていた。「豆細工」では、明治時代からとりあげられていた「弥次郎兵衛」「弥之助」は昭和に入っても変わらずにとりあげられていることがわかる。作った後に遊べるものとして、「豆細工」を代表する題目であったといえる。

「粘土細工」では、小川幼稚園で「円形」「亀」「植木鉢」、第一幼稚園で「みたらし」「植木鉢」と、具体的な題目は少ないが共通性がみられる。

これ以外の手技では、時の記念日の「目さまし時計」「お祭りにちなみ提灯」「七夕」「お雛様」や「手提げ」「籠」「自動車」のような行事に関連するものや使って遊べると思われるものがあげられていた。

### 3．指導方法

保育者たちは、どのように指導していたのであろうか。大正時代の指導方法がわかる記述は少ないが、おもなものを拾い出してみる。

松本幼稚園では、大正2年度に「画き方」で「上手にかけし者には紙にかかしむ」、「剪紙」で「切りて与へしが」という記述がなされている。大正3年度には、「はさみ方」で「唱歌にうたうものを練習せしむ」となっていて、他の活動と関連づけて指導していることがわかる。大正13年度には、「剪紙」で「木の葉を画きおき」、「貼紙」で「自動車の車体を画きおき」と書かれていて、保育者があらかじめ準備した教材を用いていることがわかる。

昭和に入ると指導方法にかかわる記述は、大正時代より多くみられる。昭和3年度には、「立体の箱にては上の紐の結び方を一人一人教ふ」、「摺紙」で「今日は少し方法をかえて見れば」と、指導の仕方を変えていることがわかる。ただし、具体的にどのように変えたかは記されていない。「厚紙細工」では「今日は方法を少し換え、自由遊戯の中に1テーブルづつ落ちついて静かにさせる」「自由遊戯の中に1テーブルづつ仕上げる」と書かれていて、グループに分けて指導し、保育者の目が届くようにしていることがわかる。「画き方」では、「昨日の記憶を辿らせる」ことや「先生のお宅のお庭へいてふと紅葉を拾ひに行き、他のお子さんには美しく紅葉した幼稚園のお庭の桜葉を落して2枚づつ拾はせ写させ彩らせれば」という指導が行われていた。「剪紙」では、「書きて与えそれを順次切らしむ」、「手技」で「厚紙で切りぬいておいた真白な台紙へ」と記述されていて、保育者が準備したものを用いていることがわかる。「少し複雑なれば細かく注意し」ている。また、「今日のお稽古は子供に相談すれば皆希望なればなす」ということもあった。

昭和4年度にも、グループごとに作らせることや、保育者があらかじめ書いておくような準備をすることが行われていた。「剪紙」で「昨日見て来た田植を表現させる為」「先日林昌寺で見て来た水連」、「厚紙細工」で「昨夜の節分の話を簡単になし豆を入れし枡を思ひ出させて」と書かれていて、経験と結びつけた題目をとりあげていることがわかる。「剪紙」で「一定の紙を受けて切り方のみ指導し鉛筆で線をかくも只切るも自由にさせ」ていたり、「豆細工」で「一本のひごを与え折り方の練習をさせ後は自由に製作」「長いひごと見本を1づゝ与へ後は自由」「長いひご一本を与へ梯子を作るに必要な事のみ注意しておき後は全く自由製作」にさせたりしている。「ぬり絵」では「指示法でなせば」と、保育者が指導することもあった。「画き方」では「柿の葉を与え輪覚を写させ」たり「いてふの葉を与へ」たりしている。「摺紙」で「手だけ切ってあげし」と保育者が手伝っていたこともある。「手を加えねばならぬと思ったおけいこ」という記述からも、保育者が手伝って作ることがあった様子がうかがえる。「摺紙」で「お唱歌に連絡をつけておけば大喜び」というように、他の活動と結び付けていた。「母の会に見せると言えば皆喜んで」「父兄にお見せすると云へば喜び一心に考へて作る」という記述から、作る前に動機づけをしていることがわかる。

昭和6年度の「赤之組」でも、「出来上って日の丸の歌を歌ひ」というように他の活動と結びつけることや、「1テーブルづゝ貼らせる」というようにグループに分けて指導することが行われていた。「塗り方を少しして見せて」「桜桃1テーブルに4つ程葉も見せて塗り方をしてみせて」いたり、「貼紙」で「順序に2回桜、鶏、犬に言ひたる後その通り貼らせ」たりしていて、保育者が手本を示していたことがわかる。「栞」を作った時は、毛糸の房を保育者がつけている。「摺紙」で「翼を折る

ところから皆みてやる」、「剪紙」で「少し手を入れなほしてやる」、「貼紙」で「手にのりをつけてやり貼らす」というように、保育者が手助けしている。「画き方」で「村井行きの話をなして薄2、3本を見ながら」と、実物を準備している。

昭和6年度の「紫之組」でも、「ぬり絵」で「岡の線を書き与へ」「下絵を画きおき」、「貼紙」で「色紙をきりて種々与ふ」というように、保育者が準備をしていた。「画き方」では「先日蟻ヶ崎に行きたりし時の観想を少し話して」と、経験したことを思い出させてから絵にしている。「画き方」で「林檎を観察した上で」、「ぬり絵」で「実物を観察させ説明して」というように、実物を準備して見せることが行われていた。「えがき方をしつ、1テーブルづ、豆細工」というように、グループに分けた指導も行われていた。

小川幼稚園では、「彩色」で「翌日の感を問答して」、「豆細工」で「水に住むもの、問答」というようにやり取りをしたり、「きのふ飾ってあったものをよく観察させて自由ニ色を塗した」というように観察を取り入れたりしている。「貼紙」で「神輿を貼らして唱歌お祭りをうたった」「小軍艦の出来上がりを喜び萬歳歌など歌って」「汽車遊びを又唱歌しながら園内を廻る」というように、作ったあとに他の活動につなげている。「摺紙」で「運動帽をたたみて運動会ごっこの真似など面白かった」と記されていて、ごっこ遊びへと展開していることもあった。

第一幼稚園では、昭和2年度に「半分位ヅ、オ部屋デ」「オ部屋ニテ五六人ツヾ」「御部屋ニ半分ツヾ入ツテ」というように、半数や少人数でやらせている。「ぬり絵」でいろいろな紅葉の葉を拾ってきて「想像ト観察トヲ連絡シテ塗ツタ」と記されている。

昭和4年度の「二組」では、初めての「画き方」で「色ニ対スル観念ガハツキリシテヰナイカラ充分教ヘテヤル」と記されている。「豆細工」の初めてのときには、「サシ方ヲ丁ネイニヲシヘテヤツタノデ半数ホドハ出来タガ」と書かれている。「摺紙」で「舟ノ唱歌カラニサウ舟ヲ作ラセテ遊バセルコトニスル」と記述されていて、他の活動と関連させていることがわかる。「塗リ方ハマダ仲々出来ナイカラ大部分手伝ツテヤル」と、保育者が手を加えることもあった。「手カゴハ今日ハ十二三人ダケニ作ラセタ」とあり、グループに分けて少人数で指導していた。「防空演習ニ関連シテ塗リ板ニ飛行機ノ各種ノ絵ヲカイテ子供ニ示シ」「面白イ結果ヲ得タ」こともあれば、「自由ノツモリデアツタガ示範スル為ニ五六種モ作ツタノデ子供ハソレヲ真似タ」ということもあった。保育者が手本を見せていたことがわかる。

昭和4年度の「一組」でも、「二分団に分けて林檎の写生」というようにグループで指導していた。「ぬり絵」では「実物を見て塗る様幾度も注意しても全く無関心で勝手にぬる。観察の指導が足らぬためである」と反省もしている。

保育者が手を加えたり、手伝ったりすることは、明治時代にも行われていたが、昭和に入ってからも行われていたことがわかる。手本を示すことも、昭和に入ってからも行われていたが、今回対象とした「日誌」等からは、示し方の工夫についての具体的記述はみられなかった。実物の準備、材料の準備、他の活動と結びつけることは、大正時代にも昭和に入ってからも行われていた。昭和に入って適宜取り入れられていたと思われるグループに分けて指導することは、明治時代から大正時代にかけてはみられなかった。保育者がよりよく指導しようとして、必要に応じてグループに分けるようになったといえよう。

### 4．出来上り具合と幼児たちの様子

「よくできた」「できなかった」という類の記述が、三園とも、どの年度でもみられる。だが、年度により記入されている頻度は異なる。年度によっては、成績についての記述そのものが少ないこともある。「喜んだ」という類の記述は、大正時代には少ない。

大正時代の松本幼稚園では、大正2年度には「よく出来たり」と書かれていることもあるが、「剪紙」で「切りて与へしが大半はできす」ということもあった。大正3年度には、「画き方」で「まろきものはすみすみ迄出来かたし」とあるが、「縫取」では「結果はよかりし」と記されている。同じ「縫取」でも、「むつかしくはないか」と、幼児たちの様子から保育者が感じたと思われることが記述されていた。大正4年度には、「紙刺」で「始めてなれど皆喜び成績よし」と記されていた。大正5年度には、「豆細工」で「独りにてなしたるものは3分の一位なりき」と、できなかった様子が書かれていた。大正10年度には、「摺紙」で「かなりに出来る」、「画き方」で「上手に画きたり」「なかなかよく画けたり」ということもあれば、「剪紙」では「三分の一は完全、他はやうやう」ということもあった。大正13年度には、「摺紙」で「手をかけずに言うまへに出来たり」ということもあれば「少しむずかしかりし」ということもあった。「画き方」では「少し下手になりたる様」ということもあった。

喜んだという記述はなされていない年度もある。大正

2年度には「つなぎ方」で「はじめてなれば喜びたり」、大正4年度には「紙刺」で「始めてなれど皆喜び」、大正10年度には「積木」「豆細工」「画き方」「剪紙」で、「喜んで」「大よろこび」というような記述がみられた。大正5年度には、それまでに作らせた手技の作品を「竹の枝につけて持たせやりたれば大喜びにてかへり行けり」、大正10年度には「つなぎ方」で「大よろびにてもちかへれり」と、喜んで持って帰ったことも、回数は少ないがあったことがわかる。

昭和に入ると、「よく出来た」という類の記述が多い年度もあれば、結果についてあまり記入されていない年度もあった。「喜びて」という記述は、どの年度でもしばしばなされていた。年度ごとにみていくと、昭和3年度には「貼紙」で、「予想以上の出来栄えなりき」「今日の成績は大出来なり」とよかったことが多いが、「観察せしよりしばらくなればバックの記憶おぼろげにて特別の子供を抜いては余り成績面白からず」ということもあった。「摺紙」では「皆よく出来るには驚きたり」「大部大勢知っており皆よくできる」というように、とてもよくできた時や「割合によく出来たり」という時もあったが、「成績おもしろからず」「紙が滑りたゝみにくいせいか少し細か過ぎる様な感じす」とよくできなかったこともある。「摺紙」では同じ物を何度かたたむこともあった。「カブトは先度意外にも不成績なりしかば覚えも悪いからんと思いしが古き物故か家にてもたゝんで見た由にて割合に記憶よかりき」「もっとよく覚えて居るならんと思われしが割合にたゞめず大騒ぎにて落ちつかず実に困る」という記述もみられた。「画き方」では「よくまとまった物で驚く」時も「余りよい出来ならず」という時もあった。「剪紙」では「斜に切る事は少し難しき様見えたり」ということもあったが、「早くきれいによく剪れる様になりたり」「大かたよく切れたり」と、よくできた時の方が多かった。「箸排」では、「面白きもの多く出来た」、「画き方」の「自由」で「面白き作物可成り出来たり」と書かれていることもあった。喜んでいたという記述はしばしばみられる。とりあげられていた回数は多くはないが「豆細工」や「厚紙細工」では、よく喜んでいる。「弥次郎兵衛」の時には、「仲々重心のとり難き物なれど殆んど立つ様に出来指先、鼻の頭にのせて大喜び」と記されている。「摺紙」では、「つばめ」「オルガン」や「豚」、「自由」の時に喜んでいる。「時計」の時には、「大喜びに持ちかえる」と書かれていた。「剪紙」では、「自動車車体」や立体的なものを作った時に喜んでいた。このほかには「興味を持って」とか「興味深く」と記述されることもあった。

昭和4年度には、よくできたと記述されていることが多く、できなかったということは少なかった。特に「摺紙」では、「皆よく出来」「皆よくできて」という類の記述が3割を超え、「割合によく出来」という記述を合わせると半数近くを占める。とりあげられている回数は少ないが、「豆細工」も「皆よく出来」「大体に於てよく出来」ということが多く、「折り方、通し方の基礎練習」で「自由」に製作させた時には「(飛行機)(家)(テーブル)(四角)(梯子)(旗)(串団子)等随分面白い物が出来る」と記されていた。「剪紙」「貼り紙」では、はじめのうちは「どうやら切って」「少しむづかしけれどどうやら作り」ということもあったが、「割合によく出来る」「皆よく出来る」ことが多くなる。「割合ひにきれいに貼り」「思ひ思ひに貼り面白い物を作る」こともあった。2月の「果物籠」で「しばらく振りのお稽古にて大喜び」で「全部子供の手にて仕上げ」、保育者が3日かかっても手を加えなければいけないと思っていたものを1日でつくりあげ、「思ったよりよく意外な成績なり」と記されている。ただし、3月の「額縁」の時は、一テーブルずつ貼らせるが「始めての事なれば随分手汚たないものもありき」と記されていて、きれいにできなかったこともあった。「画き方」では、「未だ表現力鈍く殆んど画けなかった」「今年はどうしてか物にならぬ様な物の方が多く」「変な彩りばかりにて困る」「余りよくできず」というように、できなかったという記述は「画き方」が一番多い。「殆んど興味なし」というように、興味を示さなかったことがあったのは「画き方」のみである。だが、2月には「全体として此の頃めっきり自由画の進歩して来たには驚く」と記されていて、子どもたちの成長がうかがえる。この年度も「大喜び」「喜びたり」という記述がしばしばなされている。「摺紙」「剪紙」「貼紙」で、喜んだという記述が多くみられる。「豆細工」も喜んでやっていた。できなかった「画き方」は、「自由」な時が多かったが、喜んでやったという記述は少ない。「ぬり絵」も喜んでやったという記述は少ない。作った作品を喜んで持って帰ったという記述は、「摺紙」や「豆細工」「貼紙」でみられた。

昭和6年度の「赤之組」は、出来上がり具合に関する記述はわずかしかなされていない。「貼紙」で「奇麗でないのが多い」「完全は半数程」、「画き方」で「進歩の様子見えず」というように、よくできなかった様子が記されている。喜んでやったという記述は「剪紙」で、喜んで持ち帰ったという記述は「つなぎ方」と「(日の丸)の旗」でみられるだけである。

昭和6年度の「紫之組」では、他の年度に比べると、

出来上がり具合や幼児たちの様子に関する記述は少ない。「よく出来た」「上手に出来た」という記述は、「豆細工」「剪紙」「画き方」「摺紙」で1回ずつなされているだけである。その代わり、「美しく出来上りたり」「美しく仕上げたり」という類の記述がなされている。「貼紙」「剪紙」「摺紙」で4～5回書かれていたし、「画き方」でもみられた。喜んでやったという記述も少ない。「大喜びにて」「大喜びなりき」という記述が、「つなぎ方」や「画き方」「ぬり絵」「剪紙」「貼紙」「摺紙」等でみられた。「豆細工」の「こま」では、「まはしてよろこびたり」と書かれていて、遊んで喜んでいることもあった。「喜び持ち帰へりたり」ということもあった。

第一幼稚園の昭和2年度には、「摺紙」で「ナカナカ困難ダッタガ」ということも、その逆に「ヨクタ、メタ」ということもあった。時には少人数ずつで「手伝ナガラタ、ンダ」こともあった。「豆細工」では、「皆上出来ダッタソウシテ一人デ出来タ」、「自由画」では「ナカナカ面白イ」という記述もみられる。「御雛様の台作り」では「色々ヲ一ツ一ツ数ヲカゾヘナガラ塗ツテイル子供、メチャメチャニヌル子同ジ事ヲ同ジ様ニ云ツテモヤツタ子供ニヨリテ変ツタ様ニ塗ラレテ行ク」と書かれていて、出来上がりがさまざまであったことがうかがえる。

昭和4年度の「二組」では「大変ニ喜ンデ」「大喜ビデ」という記述が、「摺紙」「手技」「ぬり絵」「画き方」で、「喜ンデ」が「ぬり絵」「手技」でみられた。作ったものを持ち帰る時も「大変ニ喜ンデ」いた。「ぬり絵」で「始メテナノデ珍ラシガル」「心カラ好キラシイ」、「画き方」で「大部分ノ子供ハトテモ画キ方ヲスイテヰル」と書かれていて、「ぬり絵」や「画き方」は、喜んでやることが多く、好かれていたようである。「一組」では、「手技」で「上手に出来ない」「大変不出来であった」こともあるが、「大喜びで一生懸命になつて作つた」、「おひな様」で「摺み方が簡単なのでとても大喜びをする」こともあった。1月になると、「鋏の使い方も此頃では大分上手に出来るやうになつた」と、上達している様子が記されていた。

小川幼稚園では、「喜び」「熱中し」「よく出来た」という記述が多くみられた。「彩色」で「皆非常ニ上手好結果」「中々よく出来た」「中々上手ニ塗った」、「画き方」で「中々上手であった」「中々上手ニ面白いものが出来た」等の記述がなされていた。「粘土」で「非常ニ喜び熱中大ニ没頭セる」「非常ニ喜び凡一時間位熱中して」「粘土ハ各児の楽しむものニて」、「貼紙」で「大ニ興味ある仕事とて非常ニ上手であつた」、「摺紙」で「割合ニ容易ニ出来て皆喜んだ」と書かれている。製作では「出来上りを喜び」「皆よろこんで作った」「非常ニよく出来て喜んだ」と記述されている。逆にうまくできなかったことも、回数は少ないが記されていた。「余り上手ニ彩色できなかつた」と記述されている。「彩色」では、年少には難しいことがあり、「年少児の材料としてハ今一度考へを要せん」「観察のふ充分であったか又年少児ニハ少し六ツケし過ぎなりとにかくふ成績であった」というような記述がなされている。この時には「絵を変へることニしたいもの」と教材の反省をしている。

昭和に入ってからの三園を比べてみる。松本幼稚園では、「摺紙」「貼紙」「剪紙」「豆細工」はよくできた時が多く、「画き方」はよくできなかったことが多かった。小川幼稚園では、「彩色」（年少児は除く）や「画き方」「貼紙」が「上手」であった。何を喜んでいたかでは、松本幼稚園では「豆細工」「厚紙細工」「摺紙」を喜び、「画き方」や「ぬり絵」はあまり喜んでいなかった。第一幼稚園では、「ぬり絵」や「画き方」等を、小川幼稚園では「粘土」「製作」等を喜んでいた。松本幼稚園と、第一幼稚園、小川幼稚園とで、違いがみられる。上手にできたかどうかと、喜んでいたかどうかは、ほぼ一致している。

本論集第57号みてきたように、明治時代から大正時代にかけて、第一幼稚園の「一の組」「二の組」で不出来という記述が比較的よくみられたのは「摺紙」「画き方」であった。城巽幼稚園では、不出来な時が多かったのは「箸」「摺紙」で、良かった時が多かったのは「豆細工」「画き方」「積木」であった。第一幼稚園で喜んでやっていたのは「積木」「摺紙」で、「一の組」では「板排」や「豆細工」、「二の組」では「画き方」も喜んでやっていた。城巽幼稚園では「豆細工」と「板排」を喜んでやっていたと思われる。

昭和に入ってからは、「板排」や「積木」は、とりあげられていても回数が少なくなっていて、喜んだという記述もあまりなされていない。

「画き方」「ぬり絵」は、園による違いが大きい。「ぬり絵」に関しては、昭和4年に行われた保育座談会の中で東京女子高等師範学校附属幼稚園の保姆の神原が「大抵、みんなの子供が『ぬりゑ』が好き」[5]と述べている。「ぬり絵」が好きという指摘は、「幼児の絵について」の中でも、「実際ヌリエは子供の非常に喜ぶもの」で、「幼児の遊びの一つとして、まづ捨てる事の出来ぬものだと考えられ」るという[6]。しかし、松本幼稚園では、実物を見せてから塗るような工夫もしているのに、「ぬり絵」はそれほど喜ばれていなかった。「風船」を好きな色で

塗る時にも、喜んだという記述はみられない。ただ、昭和4年度の「月と山」の時には、「割合ひに簡単で好きな画なればいつもよりも大変よく塗れたり」と書かれていた。また、小川幼稚園で「絵を変へることニしたいもの」という記述があったことから、その年齢の幼児に難し過ぎず、興味が持てる題材であるかどうかが、大きな要因であると思われる。先の保育座談会でも、「ぬり絵」の目的や題材、教え方が話し合われているが、保育者の教材研究が重要であるといえよう。小川幼稚園の昭和3年度の「日誌」には「彩色帖研究ノタメ出向」、昭和5年度には「彩色帖ニツキ研究」という記述がみられ、保育者が熱心に教材研究をしていたであろうことがうかがえる。

## おわりに

今回みてきた「日誌」等には、本論集第57号で指摘したような、たとえば「摺紙」で「大紙にて摺み示して」というような指導方法の工夫は記されていなかった。こうした方法は当たり前のこととして受け取られ、わざわざ記入しなかったとも考えられる。小グループに分けたり、組を二分したりして、指導することが行われていた。幼児たちによくわかるように、また、きちんと出来上がるようにするためには、一クラスの人数が多すぎるので、少人数での指導を行っていたと思われる。こうした指導は、本論集57号でみてきた明治から大正にかけての「日誌」等には記されていなかったので、新しい方法であったといえよう。第一幼稚園では「分団」という言葉が用いられていて、大正自由教育の中で提唱された分団式教授法に影響を受けたとも思われる。本論集第57号で、大正2年度には実物を見て画くことが行われていたことにふれたが、昭和に入って、実物を見て画いたり塗ったり、また実物を型どったりすることが行われていて、保育者が画き示してそれを見て画かせるという記述はみられなくなっている。

先にもふれた「わが国幼稚園における手技の歴史—その9—」で、よく行われていたことの一つとして「ぬり絵」をあげたが、この三園の状況からも昭和に入ると「ぬり絵」は広がっていた。それは、京都市立日影幼稚園の昭和7年3月の「記録」をみると、「ぬり絵」が行われていたことがわかることからもうかがえる。小川幼稚園で行われていた「売買遊び」の製作からは、昭和2年の東京女子高等師範学校附属幼稚園の「おもちや屋遊び」[7]や「動物園遊び」[8]に影響され、長期間かけて共同で行うような活動が、広がっていたことがうかがえる。

### 註

1）京都市立幼稚園の資料は京都市学校歴史博物館の竹村佳子学芸員、名古屋市立第一幼稚園の資料は岡林恭子前園長、松本市立松本幼稚園の資料は旧開智学校の学芸員の方々にお世話になりましたので、記して感謝いたします。

ここで用いる松本幼稚園の資料は、日誌を書き写したもので、当時の日誌そのものではない。旧開智学校にはこの資料しかなく、松本幼稚園にあった資料は移管されているということであった。もとは縦書きであったものを横書きに直しているので、書き写す際の間違いがないとは言い切れないし、数学の書き方や仮名遣に疑問があるが、当時の実際がわかる資料は非常に少なく貴重だと思われるので、分析の対象とした。

2）ここで用いた表記以外に、松本幼稚園では、大正時代には「紙摺」「紙剪」「画方」と書かれていることが多く、昭和に入ると「摺み紙」「剪り紙」「貼り紙」「画キ方」と書かれていることもある。小川幼稚園では「画方」「剪り方」「貼り方」「たゝみ方」、第一幼稚園では「画キ方」「塗絵」「ヌリエ」「ぬりゑ」「たゝみ紙」「切紙」等の記述もみられるし、「折紙」という言葉も使われていて、さまざまな表記がなされている。

3）『児童教育学科論集』第33号、1999年、19頁。

4）女子高等師範学校附属幼稚園『手技図形』、高等女子学会、1906年。

5）『幼児の教育』第29巻第10号、日本幼稚園協会、1929年、43頁。

6）『幼児の教育』第31巻第8号、日本幼稚園協会、1931年、58頁。

7）『幼児の教育』第27巻第1号、日本幼稚園協会、1927年、54-55頁。

8）『幼児の教育』第27巻第4号、日本幼稚園協会、1927年、44-47頁。

引用文は基本的に原文のままとしたが、旧漢字は新字体に、繰り返しの記号は文字に直す等、変えた部分もある。また、「日誌」等は手書きのため、「つ」と「っ」のように判読が難しいものもあったが、より近いと思われる表記にしてある。